

# 大学図書館の新生オリエンテーション ～情報リテラシー教育への位置づけとして～

石川 敬史

(工学院大学図書館)

## 一 はじめに

### 特集・新生の受入体制

多くの大学では、毎年四月の入学式後に新生オリエンテーションを実施している。その内容は、学部・学科や事務系部署が主催する①学部・学科紹介と学習指導、②OB／OGなどの講演会、③事務系部署による履修登録、施設利用法、奨学金に関する説明会や、学生団体が主催するサークル紹介や新生歓迎祭などの行事がある。近年は、そのプログラムも多様化し、四月中旬から五月上旬にかけてオリエンテーションキャンプ（合宿）を行っている大学や、学生団体が新生オリエンテーションをはじめ、入学

式まで企画し運営する大学もある。

各大学の新生オリエンテーションの目的は、勉学の動機づけや大学施設の活用法を周知すること以外に、新入生同士や在学生、教職員との交流を積極的に図り、これからの充実した学生生活を支援することにある。もちろん、新生オリエンテーションは、大学の一機関である図書館においても実施されている。

大学図書館の機能には、①研究支援機能、②教育支援機能、③公共的機能があるが、図書館が実施するオリエンテーションなどの新生向けプログラムは、教育支援機能として位置づけられている。

二 新入生対象の図書館利用教育

(一) 図書館利用教育

近年、図書館サービスの高度化と情報化、情報ニーズの増大を背景に、図書館の活用能力や、さまざまな情報源を効果的に活用するための知識や技術を身につける必要性が高まっている。こうした中で図書館では、主に学生を対象とした「データベースガイダンス」、「文献探索講習会」、「卒業生ガイダンス」などを実施しており、こうした取組を図書館利用教育という。

図書館利用教育とは、『図書館情報学用語辞典』(丸善、二〇〇二)によると、「図書館の利用者および潜在利用者の集団を対象に計画、実施される、組織的な教育的活動」と定義されている。そして、図書館利用教育は、広く必要性が認識され、理論研究、数量的調査、実践報告など多数の成果が出ている。

(二) 『図書館利用教育ガイドライン(大学図書館版)』<sup>①</sup>  
 大学図書館における利用教育を実践するうえで、内容や方法を体系化したものが『図書館利用教育ガイドライン

(大学図書館版)』(以下、『ガイドライン』という)である。『ガイドライン』は、一九九八年に日本図書館協会図書館利用教育委員会が作成した。

その内容は、Ⅰ. はじめに、Ⅱ. 各図書館で実施すべき項目と手順、Ⅲ. 目標、Ⅳ. 方法から構成されている。このうち、Ⅲ. 目標とⅣ. 方法は利用者のニーズや情報活用能力の到達度に合わせ下記の内容に区分され、具体的な目標や方法が領域ごとに設定されている。

領域一：印象づけ  
 各自の情報ニーズを充たす社会的機関として図書館の存在を印象づけ、必要が生じた場合に利用しようという意識を持つようにする。

領域二：サービス案内  
 各自の利用する図書館の施設・設備、サービスおよび専門的職員による支援の存在を紹介し、その図書館を容易に利用できるようにする。

領域三：情報探索法指導  
 情報の特性を理解すると同時に、各種情報源の探し方と使い方を知り、主体的な情報探索ができるようにする。

領域四：情報整理法指導  
 メディアの特性に応じた情報の抽出、加工、整理、お

よび保存ができるようにする。

・領域五：情報表現法指導  
 情報表現に用いる各種メディアの特性と使用法を知り、目的に合った情報の生産と伝達ができるようにする。守るべき情報倫理を伝える。

(三) 方法

新入生を対象としたグループ形式の図書館利用教育には、次のような方法がある。

① オリエンテーション

オリエンテーションとは、大学コミュニティへの参加者を対象に、図書館の施設、サービス内容、利用方法などを説明する初期レベルの図書館利用教育である。

多くの図書館は、教務課や学生課が主催する事務系の新入生オリエンテーションの時間内に、数十分間を図書館のオリエンテーションとして実施している。図書館におけるオリエンテーションの最大の目的は、図書館利用の動機づけであるが、実施時間は数十分程度と少なく、大教室で実施される傾向にある。他方、ゼミや学科などの申込みにより、四月の授業開始後に図書館が主催してオリエンテーションを実施する図書館もある。

以上のようなオリエンテーションの実施方法として、①配布資料に基づいた口頭説明、②PowerPointを使用した口頭説明、③ビデオの上映などがある。また、図書館が主催するオリエンテーションには、次に述べる図書館ツアーが含まれる場合が多い。

② 図書館ツアー

図書館ツアーとは、図書館サービスや施設・設備の利用方法などについて、一〇〜二〇人程度のグループを図書館員が実際に図書館内を案内するものである。オリエンテーションの一環として、学科やゼミ単位で実施される場合や、図書館が参加者を募り、個人参加で実施される場合がある。図書館ツアーは、教室で行われるオリエンテーションとは異なり、図書館利用を実際に体験することができるため、新入生の図書館利用の動機づけとして有効な方法である。

③ 学科関連指導

学科関連指導とは、教員や学科からの要請を受けて図書館員が授業時間の一部を使い、情報探索法などの指導を行う方法である。初年次教育の一環として、一年生のクラスやゼミ単位に、授業時間の一部を使いOPAC<sup>②</sup>やデータベースの基礎的な情報探索法をガイダンスする図書館もある。このガイダンスは、新入生にとって学習する主題と

関連するため効果が高い。

なお、ガイダンスで取り上げる主題領域や使用するデータベースなどを、事前に図書館員と担当教員との間で打ち合わせを行っているケースが多い。

以上のうち、オリエンテーションは、先の『ガイドライン』の領域一と二を、図書館ツアーは主に領域二を達成する方法であり、『ガイドライン』において基礎的な段階として位置づけられている。また、学科関連指導は領域三の基礎的内容を達成する方法といえる。

一般的に多くの図書館では、新入生向けの図書館利用教育として、毎年四月にオリエンテーションと図書館ツアーを行っている。しかし、その方法以外にも、初年次教育の一環として情報探索を内容とする学科関連指導が継続的に行われる場合がある。

一方、こうしたグループ形式以外の図書館の取組として、①ポスター、館内のサイン（掲示）、パンフレット、PR紙、パスファインダー<sup>③</sup>などの印刷メディアの活用、②ホームページ、メールマガジン、ビデオなどの電子・映像メディアの活用がある。これらは、『ガイドライン』の領域一から領域三を満たす方法であるとともに、学内への広報戦略において有効な方法として活用されている<sup>④</sup>。

(四) オリエンテーションの実施状況

五学部以上を擁する大規模大学の図書館調査（二〇〇一年）<sup>⑤</sup>によると、図書館のオリエンテーションについて、「大学のオリエンテーションの一環として実施」が六八%、「図書館独自で実施」七六%、「両方実施」四八%、「実施なし」三%であった。このうち、「図書館独自で実施」する場合、図書館ツアーを行っている図書館は八八%に及んだ。

実施時間は、「大学のオリエンテーションの一環として実施」する場合が三〇分以内（七三%）、「図書館独自で実施」する場合が三〇～六〇分（五八%）という傾向を示した。しかし、オリエンテーションに図書館ツアーや基礎的な情報探索法が含まれるところや、図書館ツアーの中にOPAC検索演習が含まれるところもある。それは、各図書館が実施時間や会場、担当者などの制約を踏まえ、それぞれの事情や対象者（学部・大学院・留学生等）に沿ったプログラムを設計しているからである。

次章では、オリエンテーションをはじめとする新入生対象の図書館利用教育の実践例を紹介する。

三 図書館の実施例

(一) A大学図書館

A大学は、学生数約八、〇〇〇人の人文・社会学系学部を中心とする大学である。図書館の蔵書は約四五万冊、雑誌は約五、〇〇〇タイトルを所蔵している。

A大学における図書館のオリエンテーションは、事務系オリエンテーションの時間内に約三〇分間、七つの学部・学科の一年生と編入生を対象に八回行われている。そこでは、三名の担当者がPowerPointを用いて口頭で説明をしている。このオリエンテーションは、年々実施学部が増加し、二〇〇六年度から、「図書館ガイダンス」を実施している学部を除き、全学部で実施している。

「図書館ガイダンス」とは、三つの学部・学科を中心に、一年生のゼミの一コマの中でOPACやデータベースの検索法を約八〇分にわたり講義・演習するものである。このガイダンスは一九九五年から開始し、実施する学部・学科も増加している。

一方、A大学には都心部に大学院生が主に在籍するサテライトキャンパスがある。そのため、図書館は、サテライ

トキャンパスの事務系オリエンテーションの枠内で、①本館から図書を取り寄せ方法、②学外からの文献複写の申込み方法、③OPACやデータベース検索のデモンストレーションを約四〇分行っている。また、サテライトキャンパスの留学生別科を対象に、A大学キャンパスへ行事で訪れる機会に合わせて、図書館の利用法や図書館ツアーを含む「留学生別科ガイダンス」を約六〇分実施している。

(二) B大学図書館

B大学は、学生数約三、〇〇〇人規模の人文・社会学系学部を擁する女子大学である。図書館の蔵書は約三六万冊、雑誌は約四、五〇〇タイトルを所蔵している。

B大学図書館は、事務系オリエンテーションの時間内に図書館のオリエンテーションを実施している。二〇〇六年度は、学科別に一〇〇～四〇〇人を対象に四回実施した。図書館におけるオリエンテーションの企画は閲覧係を中心に行われ、各回実施する担当者は図書館員一名とパート職員一名で行われる。

二〇〇六年度の内容は、①館長の話（二五分）、②「図書館紹介ビデオ」の上映（二〇分）、③図書館員による補足説明（一〇分）であった。このうち「図書館紹介ビデオ」

はゼミの卒業制作として学生が映像やデザインを作成し編集した作品であり、図書館員は製作過程でビデオの構成や映像、シナリオなどのアドバイスを行った。

B 大学図書館では、以前から先輩が後輩を案内する雰囲気を用意したオリエンテーションを設計している。二〇〇三、二〇〇四年度は、ナレーションとBGMの吹き込みをした PowerPoint の上映と図書館員が口頭で補足説明した。今年度は、学生の視点から作成した映像を上映したため、新入生にさらに好印象を与えたという。

また、B 大学図書館では、二〇〇三年度から新入生向けのガイダンスとして、①入試広報課と共催の「IT実践講座（入学前ガイダンス）」、②「基礎ゼミ・フレッシュマンゼミガイダンス」を実施し、図書館の効果的な利用法やOPAC 検索法を積極的にガイダンスしている。

### (三) C 大学図書館

C 大学は、学生数約七、〇〇〇人の理工系大学である。図書館の蔵書は約二六万冊、雑誌は約三、〇〇〇タイトルを所蔵している。

C 大学図書館は、夜間部（第二部）の新入生約三〇〇人を対象にした約二時間の事務系オリエンテーションの時間

内に、図書館のオリエンテーションを一五分間実施している。方法は実施する担当者個人に任せられているが、主に PowerPoint を使用している。

説明内容は、従来、図書館のフロアと利用案内が中心であったが、二〇〇六年度からサーチエンジンと雑誌記事データベースの違いや、書店と図書館の違いを充実し、短時間で図書館の印象づけを強調した内容としている。

また、四月第二・三週に図書館ツアーを複数回にわたり実施している。これは、オリエンテーション時や掲示などで図書館が参加者を募り、個人参加で実施するものである。主な内容は、①館内の資料の配置、②書庫・特別コレクションの見学、③図書館サービスの利用方法、④OPAC やデータベースの初歩的な実習から構成されている。

なお、C 大学の別のキャンパスでも、昼間部（第一部）の新入生約一、五〇〇人を対象に事務系オリエンテーションの時間内に図書館が一五分間のオリエンテーションを実施している。

### (四) D 大学図書館

D 大学は、学生数約七、〇〇〇人の人文・社会学系学部を中心とする大学である。図書館の蔵書は約六〇万冊、雑

誌は約六、三〇〇タイトルを所蔵している。D 大学図書館には新入生向けのプログラムとして、図書館オリエンテーションと図書館ガイダンスがある。

図書館オリエンテーションは、図書館の概要説明（五分）と「ライブラリーツアービデオ」の上映（四〇分）から構成され、新たに入学した大学院生と留学生、新任教員などに対して実施されている。このうち、「ライブラリーツアービデオ」は、二〇〇四年に学内の複数のサークルが映像や脚本など全てを作成し、図書館が監修を行った。ビデオには学生が多数出演し、エンターテイメント性の高い作品になっている。

図書館ガイダンスとは、各学部からの依頼により、四月から六月にかけて一年生のゼミや授業の一コマの中で行われるOPAC や雑誌記事データベースの検索実習である。このガイダンスは、全ての学部で実施されており、一回約四〇人を対象とし、一学部につき二回程度実施している。

なお、D 大学図書館では、上記の新入生向けのプログラム以外に、「文献指導」や「論文・レポートの書き方ガイダンス」（主に三・四年生向け）などが一九七〇年代後半からすでに開始され、比較的早い時期から図書館利用教育が充実していた。

## 四 課題と展望

### (一) オリエンテーションの創造

各大学においてさまざまな事情がある中で、図書館員が創意工夫をして新入生向けのプログラムを設計していることがわかる。その背景には、オリエンテーションの担当者、学生を取り巻く環境の変化や、学科や教員との連携を意識しつつ、部署内や個人で内容や方法の点検を行っていることが考えられる。上記にあげられた近年の事例をみると、対象が新入生ではあるものの、各図書館とも情報探索の内容を重視していることが読み取れる。

ある図書館では、オリエンテーションを一・二年生必修の「英語教育プログラム」の一コマの中で実施しているが、内容は下記のように時代とともに変化しているという<sup>⑤</sup>。

・一九九〇年代前半

New York Times の Index の見方

・一九九〇年代後半

雑誌・新聞記事索引CD・ROM の検索方法

・二〇〇〇年以降

雑誌・新聞記事データベースの検索方法

・二〇〇六年から  
図書館資料の探し方(グループワーク実習)

このように、前年度と同じ内容でオリエンテーションを実施するのではなく、時代の変化の中で図書館員が内容を点検し、これからの新入生の図書館利用において有益なオリエンテーションを設計することが必要である。

さらに、オリエンテーションやガイダンスの機会が増えると、図書館員にプレゼンテーション力や演出の工夫が求められるようになってきている<sup>7)</sup>。とりわけ、新入生向けのプログラムは、図書館の印象づけや図書館利用の動機づけを目的としているため、ある内容を説明する際に、一方的に口頭で説明する場合と画像や映像を用いて身近な話題やユーモアを伴い説明する場合とでは、新入生が抱く図書館の印象は大きく異なるだろう。

近年、図書館利用教育を実施する担当者の研修の機会が増加し、国立情報学研究所や日本図書館協会図書館利用教育委員会などにより取り組まれている。今後、新入生が主体的に図書館に興味を示すためには、図書館員による現代大学生の内面の捉え方や、学生との相互の関係形成のあり方、学生一人一人の動機づけに結びつける工夫など、図書館員が学生の世界を正しく認識し、プレゼンテーション力

や演出法を高めていく必要がある。

(二) 図書館利用教育から情報リテラシー教育へ

オリエンテーションや図書館ツアーなどの内容は、図書館側からみた内発的な課題が設定されている。しかし、実際に学生は、インターネット、新聞、雑誌、テレビ等、さまざまな情報収集手段を持っている。そこで、近年、就職活動をはじめとする学生生活や授業の課題、レポート作成、卒業研究などにおいて、多様な情報源から必要な情報にアクセスし、収集した情報を正しく評価し、活用できる「情報リテラシー」の習得が大学教育の中で求められている。すなわち、これからは図書館を社会的な文脈として捉え、大学の情報リテラシー教育の中で図書館の役割を考えていく必要がある。

先に示した各大学の新入生向けプログラムの中に、ゼミや授業の一コマの中で、教員との連携により図書館員が情報探索の講義と実習を行う事例がみられた。また、新入生に限らず、授業の一コマの中で図書館員が情報探索に関するガイダンスを実施する場合(学科関連指導)や、初年次教育の授業科目として教員と図書館員との分業で情報リテラシー教育を展開(学科統合指導)している大学が増加し

ている。さらに、このような情報リテラシー教育に図書館が積極的に役割を果たしている事例として、情報探索法に関する教材を作成している図書館やWebチュートリアルを作成している図書館もある。

図書館において新入生対象のプログラムを実施する際には、大学における情報リテラシー教育の枠組みの中で、各学年の授業・学習内容に沿った段階的なプログラムの設計を視野に入れる必要がある。

五 おわりに

入学式後に行われる新入生オリエンテーションは、単純に事務的な説明会に終始するのではなく、大学に希望と期待を持って入学した新入生のために、魅力的なものにしなければならぬ。もちろん、図書館においても有意義で魅力あるプログラムを設計する必要があるが、業務の非継続性、図書館内の理解と熱意の欠如、図書館員のスキル不足など構造的な問題があるのも事実である<sup>8)</sup>。

新入生が図書館に興味を抱き、主体的に図書館の利用に関わっていくためには、図書館員個々のスキルアップとともに、大学の情報リテラシー教育を視野に入れた持続可能

な組織化が課題である。

- (1) 日本図書館協会図書館利用教育委員会編『図書館利用教育ガイドライン』大学図書館版・日本図書館協会、一九九八・八、一九九頁。その他に、総合版、高等学校版、公共図書館版、専門学校版がある。
- (2) Online Public Access Catalogue: 「オンライン利用目録」または「オンライン閲覧目録」の略称。
- (3) Pathfinder. 特定のトピックに関する資料や情報を収集する手順をまとめた一枚もののリーフレット・チラシ。
- (4) 私立大学図書館協会東地区部会研究部企画広報研究分科会編『図書館広報戦略ハンドブック』広報戦略の前面展開をめざして』日本図書館協会、二〇〇一・八、三〇三頁。
- (5) 中島幸子ほか「大規模大学図書館における利用教育の研究」平成一三年度調査に基づいて』『同志社図書館情報学』一四、二〇〇三・五、一六一―三六頁。
- (6) 島山珠美「時代にあった図書館オリエンテーションを目指して」『大学図書館研究』六九、二〇〇三・一二、五三―五九頁。
- (7) 仁上幸治「大学図書館員のためのオリエンテーション技法」印象づけを重視した構成・演出の改善の試み』『医学図書館』五一(二)、二〇〇五・三、一五一―二四頁。
- (8) 石川敬史、中戸川陽子「図書館利用教育の自己点検・評価の事例」大学図書館における新入生オリエンテーションを中心に』『人間発達研究』三、二〇〇四・三、一一―二二頁。